

# 書店力 スロウな本屋 岡山県岡山市

## 書店という名の 暮らしと向き合う場所

2015年春、岡山市北区の住宅街にオープンした1軒の新しい書店「スロウな本屋」には、ベストセラーとはひと味違う、店主の目で選ばれた本が並んでいる。ゆったりとした時間の中で、大切な1冊を選ぶ場になっている。



1 店内の様子と小倉みゆきさん。もともとは押入れとして使われていたスペースを本棚にして、絵本のコーナーをつかった。2 「何冊かの本を並べることで、そこに世界ができる」と小倉さんは語る。3 絵本は全体の5割くらい。4 木造長屋を改修しているが、入り口はほとんど元のまま。人の家を訪問するような楽しさがある。

岡山駅から少し離れた住宅街に、靴を脱いで上がる新刊書店がある。戦前から残る木造長屋を改修したという畳敷きの店内には、「絵本」と「暮らし」にまつわる本が、それぞれ半分くらいずつ置かれている。ここは「ゆっくりを愉しむ」がコンセプトの「スロウな本屋」だ。「速さや効率、勝ち負けという基準以外の、もっと豊かな生き方、暮らし方は「ゆっくり」にあると思っています」そう語るの、店主の小倉みゆきさんだ。本屋の世界に足を踏み入れたのは、東京でスペイン語の通訳を目指していた29歳のとき。洋書店で働き始めたのがきっかけだった。そのころ、「本を2冊以上並べると、そこにひとつの世界が出現すること」に気づき、棚作りのおもしろさに引き込まれていった。「1冊の本を読む前と後で、人生が変わることがある」と小倉さん。次に働いた子ども本の専門店「クレヨンハウス」(東京・青山)では、赤ちゃんを抱いた女性が、DVと離婚の本をレジに持ってきたことがあったという。「何も言わずに丁寧にブックカバーをおかけして、祈るような気持ちで見送ったことがあります」

東京での暮らしに疲れ、故郷の岡山に戻った小倉さんが選んだ職場もやはり書店だった。大型書店で児童書を担当するかわら、友人が企画した野外イベントに「スロウな本屋」として参加。年に数回出店するうち、「お店はないんですか」と聞かれるようになり、「いつかは」と思うようになった。イベント参加から6年。友人らの助けを借りながら1年がかりで建物を改修し、ついに店舗が完成した。

最後に「地域を考える」というテーマで絵本の選書をお願いしたところ、たじまゆきひこ作「ふしぎなともだち」を挙げてくれた。障がいのある子とそうでない子の交流を描いた、実話に基づいた物語だ。「先入観を持たない子ども時代に、自分と異なる人と触れ合うことは『変だね』『不思議だね』から始まり、他者への関心を育みます。異なる他者との関わりの中で生まれる、やさしさや多様な価値観こそが、ともに生きるための大切な条件であり、地域という暮らしの場に今の時代、最も必要とされるものではないかと思えます」小倉さんの真摯な姿勢が、今後、ひとと本との出会いを生んでいくことだろう。(澁川祐子)

絵本コーナーの下は、子どもたちが入り込んで寝転んだり本を読んだりするお気に入りの空間になった。



写真提供=スロウな本屋、黒木太郎